

〈論文〉

有難迷惑

— 「アドネイース」 (“Adonais”) を巡って—

甲 元 洋 子

Abstract

Shelley wrote “Adonais,” a pastoral elegy for Keats in 1821. Many Keats’ researchers and admirers regard this elegy as problematic. Keats and Shelley were never close, and Keats had made effort to always keep Shelley at a distance. But Shelley took the trouble to write an elegy for Keats in any case. Shelley viewed Keats’ death as a golden opportunity to revenge himself on the critics who discounted his value. To emphasize the critics’ savagery, Shelley makes Adonais (standing in for Keats) overly weak and sensitive. His compassion for Keats was rather irrelevant. Shelley’s elegy gave birth to the fable that Keats was killed by criticism, leaving a distorted image of an effeminate Keats. “Adonais” is based on “the bower of Adonis” in *Endymion* Book II, which Shelley had read rather carefully three years before. The origin of Shelley’s Adonais is in his distorted memory of a rather inexperienced and immature Keats.

はじめに

キーツ (John Keats 1795-1821) は転地療養先のローマで1821年2月23日に死亡したが、この知らせは同年の4月11日、ピサに滞在していたシェリー (Percy Bysshe Shelley 1792-1822) にもたらされた。シェリーは直ちにエレジーに着手し、6月には完成させて7月に印刷した¹。これが有名な牧歌哀歌「アドネイース」 (“Adonais”) である。文学史上高く評価されるこ

の作品は、しかし、キーツ研究者・愛好者にとっては手放しで喜べない問題作でもある。それについては後述するとして、そもそもシェリーがキーツのためにエレジーを書いたということ自体がとても不自然で、執筆の動機に素朴な疑問を持たざるをえない。彼らの間には、例えば「リシダス」(“Lycidas,” 1637)における John Milton と Edward Young、『イン・メモリアム』(*In Memoriam*, 1850)における Alfred Tennyson と Arthur Hallam、『サーシス』(*Thyrsis*, 1867)における Matthew Arnold と Arthur Hugh Clugh のごとき親密な繋がりがなかったからである。

ロンドンの貸し馬車屋の息子であり大学には進まずに病院の外科助手となって働きながら医学を学び、その傍ら詩作に励んだキーツと、恵まれた環境で甘やかされて育ち、オックスフォード大学に進むがすぐに放校処分となり、奔放な女性関係が絶えなかったシェリーには共通する点が殆どなく、出合った当初から微妙にそりが合わなかったようだ。キーツがシェリーに初めて会ったのは1816年12月に入って間もなくの頃、Leigh Hunt 邸においてであったが、そのとき「上等の服を着て上品で博学で、広範な知識を元に宗教や政治、性道徳の不正を糾弾してまくし立てるシェリーに、それほど学識もなく貴族の生まれでもなかったキーツは気圧されてしまい、それ以来、シェリーに興味を持ちながらも遠巻きに眺めるような用心深さで彼との距離を保つようになった」(62)と Stephen Coote は説明している。また Desmond King-Hele の説明(297)によると、シェリーは会って早々に「作品の出版などやめておけと助言してキーツを戸惑わせ」、やがてキーツは「貴族の御曹司であり、ハントの一番のお気に入りでもあるシェリーに対して反発や嫉妬」を感じるようになり、「指導してやると言わんばかりの偉そうな態度」も気に食わず、翌1817年からは意識的にシェリーを避けるようになったのだという。

同じロマン派の詩人で年齢も近かったとはいえ、生まれ育った環境や学歴は全く異なるし、知り合った後に頻繁な行き来や手紙のやり取りがあったわ

けでもない。エレジーを書くほどの人間関係がそこに築かれていたとはとても思えない。よって「アドネイス」の中の悲嘆表現が、激しければ激しいほどよけいに空々しく感じられるのであるが、しかしこれはキーツ愛好家の誤解に基づく偏見であろうか。シェリーは、相手から拒絶されてもなおキーツに対して兄のような深い愛情と関心を密かに持ち続けていて、彼の死の知らせを聞いて烈しく嘆き、哀悼の詩を書かずにはおれなかったのだろうか。だがこの好意的な推測は、エレジーを読んでもみれば否定されるだろう。シェリーが、キーツの動向を熟知し、彼の思いを丁寧にくみ取った上でこの作品を書いたのではないことが明白であるからだ。

「アドネイス」はキーツにとって有難迷惑な作品だと言ってよい。最も困るのは、キーツの実像が詩の中で歪曲されていることだ。キーツは過酷な現実の中に身を置いて正面からそれを見据え受容することができる強靱な精神の持ち主であり、26年の短い人生を澁刺と生きた。だがそのキーツをシェリーはエレジーの中で、批評家に太刀打ちできなかった脆弱な犠牲者にしてしまい、ひたすら憐れむ。ひ弱で可哀そうなキーツというイメージは、読者の同情を引く上では効果的だったかもしれないが、キーツにとっては不名誉な結果を生んでしまった。Nicholas Roe は、Stopford Brook の著書 *Studies in Poetry* (1907年出版) の204頁に記載されている次の見解

[Keats] has, in spite of a few passages and till quite the end of his career, no vital interest in the present, none in man as a whole, none in the political movement of human thought, none in the future of mankind, none in liberty, equality and fraternity, no interest in anything but beauty.

を例に出して、これが19世紀のキーツ観“the nineteenth-century tradition of Keats’s boyish incapacity for the world”であると言い、その原因の一つとして「アドネイス」を挙げている。(62-63) ただ、19世紀におい

て世間一般がキーツをこのように非社会的で未熟な人間としてイメージした背景にシェリーの「アドネイス」があったことは事実だとしても、あながちシェリーだけを非難することもできないと思う。こういう結果を招く原因はキーツの側にもないわけではなかったからである。もう少しそのことを詳しく述べてみたい。

Ⅱ 『エンディミオン』の未熟性

シェリーは、牧歌哀歌の伝統に従って作中ではキーツを実名で表わさずに「アドネイス」という名の羊飼いにし、タイトルにもこれを用いた。この名前はキーツの初期の長編詩『エンディミオン』(*Endymion*, 1818)に登場するアドニス(Adonis)に起因する。『エンディミオン』第1巻で、理想美の化身と思える女性を一目見て恋に落ちた主人公エンディミオンは、彼女を追いかけて地下、海中、天空を経回る旅に出る。その過程が2、3、4の各巻で描かれるわけだが、彷徨が始まって程ない第2巻で、主人公がまず行き着くのが「アドニスの園」である。主人公はそこで、美少年アドニスと女神ヴィーナス²の逢瀬を目撃する。シェリーがエレジーに利用したのはアドニスという名前だけであり、濃厚なラブ・シーン等は完全に省かれている。しかし、この名前さえ使ってはしかなかったというのが多くのキーツ愛好者の思いではないだろうか。『エンディミオン』は野心的な力作とはいえ、まだ未熟な初期作品である。主人公エンディミオンの心的成長の物語ともいえるこの作品に、キーツ自身の成長を重ねて読むことは可能であるが、Douglas Bushが指摘するように(52)、アドニスが登場する第2巻において、主人公はまだ経験不足で自己中心的である。奔放な愛の女神と美しさ以外にこれといって取り柄のないアドニスという若者を見つめる主人公の眼差しは、憧れや羨望に満ち批判的ではない。キーツの成熟した詩想をここに見出すことは難しい。

キーツのアドニスの描写を見てみよう。キーツは、愛読書であるスペンサー

(Edmund Spenser 1552?-99) の『妖精の女王』(*Faerie Queene*, 1590)、特にその第3巻第6篇の「アドニスの園」の描写(30~49節)からインスピレーションを得たとされている(Allott 178)。1年の半分を冥界で過ごし、春になると蘇って愛と美の女神の元で過ごすアドニスの物語は、自然界の植物の死と再生の繰り返しを象徴しているのだが、スペンサーの時代にはプラトン思想とあいまって、そこに「生命循環」の意味も付加されていたことを川崎寿彦は『庭のイングランド』において指摘している。スペンサーが描くアドニスの園の要諦は、アドニス存在よりも寧ろ「実に旺んなる生殖の場、生命発生の根源の空間」(34)としての機能なのである。そしてこの「善き庭」は『妖精の女王』第2巻の魔女アクレイジアの庭、人々の情欲を刺激することのみを狙って人工の技を駆使して作られた「悪き庭」の禍々しさや不毛性と対照をなしている。(川崎 22-35) スペンサーはこの点をしっかり押さえ、魔女の庭とのコントラストを際立たせるべくアドニスの庭の終わることのない春と尽きることのない豊穡の様を詳述し、むせかえるような生命力の横溢を強調するが、アドニスの、特にその肉体の美しさについては殆ど触れていない。

一方キーツはと言うと、自然の生命力にあふれるこの庭の魅力以上に、常春の楽園という背景と、女神に愛される美青年というアドニスの状況に魅了され、その描写に夢中になっている。『エンディミオン』第2巻の389行から427行にアドニスが登場するのだが、キーツは彼を取り囲む豪華なセッティングとその美しい肉体に言及する。「高い天人花の木陰で／光と芳香と音楽に包まれ」(389-90)、「華やかな薔薇色の絹の寝椅子」(392)に横たわってアドニスは眠っている。「金色の上掛け」(396)に覆われた膝や脚、露出している「アポロ神のような／首や肩の曲線」(399-400)。そして「ほっそりした足首」(401)。ただしこの美しい青年は自主的に行動することがない。キーツ自身も言うように、アドニスは“a sleeping youth” (393)³でしかないからだ。初期作品で度々キーツが言及し、やがて精神の成熟とともに否定し

て行くことになる数多くの「夢想者」(dreamers)の一人なのだ⁴。

Karen Swann はキーツの描くアドニス を “Keats’ gorgeous, perfectly superficial youth . . . froufrou confection, a flagrantly material boy, wrapped in silk and damask” (23) と表現している。「バラ色のシルクに包まれた、凝った作りの砂糖菓子のような、破廉恥なほど官能的な若者」とは言い得て妙である。同じく Swann の “the eternally embowered Adonis” (25) という表現も鋭い。樹木や壁によって囲まれた空間 (“bower” や “chamber”) をキーツは好んで詩の背景に用いた。外界から遮断されている状態は安寧や至福の表象となるが、その中に籠る者たちの行動範囲の狭さや精神の退行なども予感させる。アドニスは正に囲われた存在である。“A chamber, myrtle-walled, embowered high,” (II, 389) の真中に置かれて様々な花や植物に囲まれ、周囲に侍るキューピッド達に見守られ、現実社会からシャットアウトされ、女神の訪れを待っているだけの存在だ。厳密に言えば待つという意識すら本人にはない。美しい絹の寝具にくるまって常春の園で眠り続け、眠りながら定期的に愛の女神と「最も大胆な詩神でさえ描くのを憚るような熱烈な抱擁」(II 527-28) を繰り返すだけの「破廉恥なほど官能的な」(Swann 23) アドニス。このような人物の名前がキーツの代名詞として採用されてしまったのである。

Lilla Maria Crisafulli Jones の解説によれば、「1818年3月、永遠に英国の地を去った後もシェリーは常にキーツのことを気にし、ハント等に頼んで自分の作品を彼に送って貰い、それと交換にキーツの新作を手に入れて読むようにしていた。特に詩集『レイミア』がイタリアに届いたときはとても喜び、絶賛した」(234) そうである。これが本当なら、何故シェリーは『エンディミオン』のアドニスなどをキーツの身代わりに選んだのか。他にもっと良いモデルは幾らでもあるのではないかと我々は恨めしく思う。だが逆にここから、シェリーはキーツ研究者がするような丁寧で精密な読み方で、例えば『レイミア』などの詩集を読んではいなかったらしいということも解る。

大体の内容が掴めたらそれで良いという斜め読みだったのだろう。それに対して『エンディミオン』はシェリーがもっと丁寧に読んだ作品であった。新米詩人だったとき、キーツは『エンディミオン』の各巻が仕上がるたびにハントやシェリーに見せていた。1818年の1月23日、弟たちに宛てた手紙(Rollins I 213-15)でキーツは、ハントとシェリーのチェックが鬱陶しい旨の不满を漏らし、二人への反発心を露にしている。ということは、シェリーは『エンディミオン』に関しては、キーツに嫌がられるくらいしっかりと読んでいたということだ。従ってその内容は比較的明確に記憶に残っていたと思われる。美しく官能的なアドニスの園などは特に印象的だったのではないか。アドニス＝女神に深く愛され夭折した綺麗な若者＝キーツという等式がシェリーの頭に閃いたとしても不思議ではない。アドニス神話が暗示する「蘇り」や「再生」も死者を偲ぶ気持ちには相応しい。「これで行こう！」とシェリーは即決したのではなかろうか。

ただしシェリーも、元のアドニス神話のままではエレジーに適さぬと考え、少し修正して利用している。これについては King-Hele の説明 (305) を援用しながらまとめてみたい。シェリーはアドニスを愛の女神の愛人にせず「ユーレイニア (Urania) の息子」にした。ヴィーナスを、ユーレイニアという「天上の愛を司る女神」に格上げし、愛人関係を母子関係に変えることにより、作品から「エロティックな要素を排除」しようとしたのである。ちなみに“Adonis”に“a”を足して“Adonais”に変えたのも、母音をプラスすることにより「より豊かで上品な感じが出せる」と考えたからだと言う。いずれも格調高い雰囲気を出すための工夫であり、それはそれで良いのだが、女神の恋人ではなく息子というアレンジも皮肉なことにマイナスの方向に作用したと思われる。シェリーはエレジーに於いてアドネイースを気の毒な被害者として憐れむわけだが、そうされることにより、女神の息子であるアドネイース(＝キーツ)の頼りなさが強調されてしまい、一人前の成年男性としてのイメージが薄れてしまうのである。

Ⅲ 「アドネイース」

「アドネイース」を概観してみよう。このエレジーには「序文」が付けられているが、そこでシェリーは次のように述べている⁵。

The genius of the lamented person to whose memory I have dedicated these unworthy verses, was not less delicate and fragile than it was beautiful; The savage criticism on his Endymion, which appeared in the Quarterly Review, produced the most violent effect on his susceptible mind; the agitation thus originated ended in the rupture of a blood vessel in the lungs; a rapid consumption ensued,

『エンディミオン』に対する容赦のない批判が・・・キーツの感じやすい精神に激烈に作用し、それによる心的動揺で肺の血管が破れて結核が充進した」というのは事実誤認である。キーツの死因は確かに結核であるが、酷評されたショックで病気が重篤になったわけではない。1818年の秋に『エンディミオン』の酷評がなされるのだが、それをキーツが冷静に受け止めて乗り越えたことは、彼の手紙などを読めば明らかであるし、既に多くの研究者が明らかにしていることである。またキーツに限らず、当時、詩人として身を立ってゆこうとする者は精神的にタフであり、我々の感覚からすればとんでもないと思われるような批評も彼らにとっては何ほどでもなかったことを King-Hele は指摘する。キーツが生きていた「19世紀の最初の25年は詩の批評が盛んな時代」(299)で、*Edinburgh Review* (1802年創刊)、*Quarterly Review* (1809年創刊)、*Blackwood's Edinburgh Magazine* (1817年創刊)、*London Magazine* (1820年創刊)などの文芸誌が次々に生まれた。文芸批評のレベルは高く、当然のことながら作品に対する批評は辛辣になり新人の扱いも手荒かった。このような環境の中でプロの詩人として生きる覚悟をし

ていたわけであるから「酷評されたからと言ってキーツもシェリーもひどく悩むことはなかった。・・・二人とも優しいほめ言葉を期待するほどバカではなかった」(301)と King-Hele は述べている。だとすればシェリーにもキーツの精神的な強さは解っていたはずではないのか。解っていながらあえて彼を無力な犠牲者にしてしまったということである。ただ、シェリーが示した間違ったキーツの死因は、彼の全くの捏造ではなかったことは付け加えておかねばならないだろう。Coote によると、酷評されたことはキーツにとって決して愉快な経験ではなく、後年、批評家たちに対する呪詛を彼が口にすることはあったという。それを聞いていたハントが、*Blackwood's* がキーツの病気の原因だと言いだし、やがてこの説がキーツの知人友人たちを経てシェリーにも伝わったのだという。「悪意に満ちた冷酷な俗人によって殺された若い天才という伝説が広まった。真実ではなかったが説得力があった」(303)と Coote は述べている。

さて「序文」に戻ると、小さなことではあるが、他にもシェリーの間違った記述がある。キーツを殺したとシェリーが糾弾する問題の酷評であるが、それについてもシェリーの認識は正確ではない。King-Hele が指摘するように(303)、『エンディミオン』に対して悪質と言ってよいほどのきつい批評を載せたのは、*Blackwood's* だった⁶が、シェリーが“most violent effect”をキーツに及ぼしたものとして挙げているのは *Quarterly Review* の方なのである。恐らくシェリーの勘違いだと思われる。勘違いと言えば、同じく「序文」の最初の方の文章、“John Keats died at Rome of a consumption, in his twenty-fourth year,”もその一例であろう。キーツの享年は26歳であって24歳ではない。これらはほんの少し手間をかけて確認さえすれば簡単に防げたはずの単純なミスである。シェリーは取る物も取りあえず執筆を急いだようだ⁷。同情や義憤も勿論あったであろうがそれ以上に、エレジー執筆が自分の不満や憤りを存分に吐露できる絶好のチャンスにもなることに気づいて心が逸ったからであろう。

シェリーはエレジーの中でしきりにアドネイス (=キーツ) を哀れむ。その短い一生が如何に恵まれなかったか、ひ弱な彼を如何に批評家達がいじめたかを力説し、自分も泣き、他者にも泣けと要請する。御涙頂戴の表現に乗せられてキーツに同情する読者も多かっただろう。しかし同情の涙ばかりでは却って死者に対する礼を失することになる。エレジーの機能は、簡潔にまとめてしまえば “to lament, praise, and console”⁸ の3つである。一人の人間の死を「嘆き悲しむ」ことと同様、その人の生前の姿や行跡にも触れ、それらを「ほめる」ことも、死者への深い敬愛の念の表明として必須の要素なのだ。ところがシェリーは55の連からなるこのエレジー⁹の中で、キーツをほめることをしない。「通りすがりの人々の(同情の)ため息が死者にとっての手向け (“the passing tribute of a sigh”)¹⁰になるという考えもあろう。しかしキーツは、Thomas Gray (1716-71) が共感した、目に一丁字もない無名の貧しい農民ではない。褒め称えられて然るべきものを十分に持っていたはずである。

これに対しては、シェリーはキーツの秀作のタイトルやその一部をエレジーの中にうまく織り込んでいるのではないか、という反論があるかもしれない。なるほど6連でアドネイスは「寂しい乙女が愛の涙を注いで育てた青白い花」 (“a pale flower by some sad maiden cherished, / And fed with true love tears, instead of dew;) に譬えられている。哀れっぽく頼りない比喻であり、キーツの真の姿を伝えているとはとても言えないが、物語詩「イザベラ」 (“Isabella; or the Pot of Basil”) の53連と54連、ヒロインが自らの涙を注いでメボウキ (その植木鉢には殺された恋人の生首が埋まっている) を育てる場面をシェリーが意識しているのは確かであろう。11連には Dream が「透明な壺」 (a lucid urn) を傾けて「星の露」 (starry dew) でアドネイスの脚を洗う描写がある。これも「イザベラ」の中で、ヒロインが埋められていた恋人の死体を掘り起こし首を切って持ち帰り、纏れたその髪の毛を梳いてやり、「滴る井戸水のように冷たい涙で」眼窩の泥を

洗い清める場面（51連）と重なっている。また「壺」という単語は、有名な「ギリシャの壺によせるオード」（“Ode on a Grecian Urn”）を読み手に思い出させるだろう。13連では、Desires や Adorations など諸々の抽象概念が訪れて悲しみを表明するのだが、彼らの様をシェリーは「秋の小川に立ち込める霧」（mist on an autumnal stream）に準えている。キーツの「秋に寄せて」（“To Autumn”）の冒頭の言葉“Season of mists”をシェリーが意識していることは間違いない。更にこのオードの2連で言及される、擬人化された「秋」が渡ろうとしている“brook”も、シェリーはここに取り入れたのかもしれない。17連には「ナイチンゲールによせるオード」（“Ode to a Nightingale”）を想起させる“the lorn nightingale”という表現も見られる。だがこれらは全てシェリーが、キーツの詩のあちこちから巧みに適語を選び出し、自分の作品に上手に利用しただけのことだ。清楚で綺麗なイメージで亡き人を表現しようとする気持ちは解る。だが、華奢で影の薄い表現ばかりでキーツの詩人としての貫録など微塵も感じられない。キーツの華麗な表現や思想の深さ、夢と現実を巡る相克の激しさ、現実認識の鋭さ等々、彼の作品が持つ真の魅力のたとえ一つにでも言及しているかというのと全くそうではない。キーツ作品のほんの一部をうまく自分の詩に取り込んでゆくという小手先の仕事をしているだけである。その小器用さは、却って死者に対する冒涇とも感じられる。

全体の3分の2を過ぎた38連から最後まで部分は、エレジーの3機能の3つ目“to console”がなされる部分である。シェリーは天に昇ったキーツの永遠の生に思いを馳せ、嘆くことを止める。キーツは死んで全ての悩みから解放された。その至福にシェリーは憧れ、最後の55連ではアドネイースの魂に導かれて彼の元へと運ばれてゆく自分を想像して詩を締めくくる。

I am born, darkly, fearfully afar;
whilst burning through the inmost veil of Heaven,

The soul of Adonais, like a star,
Beacons from the abode where Eternal are.

「アドネイース」執筆の翌年にシェリーが死亡することを考えると、まるで自分の死を予知しているようで不思議である。Stanley Plumly が喝破しているように、勝手な思い込みによる記述が多いこのエレジーにおいて「最も正確な認識が示されているのは、己の死を予見しているこの箇所」(323) だけかもしれない。

IV さいごに

エレジーに描かれているのは“Effeminate Keats” (Stillinger 246) であり、“distorted portrait of Keats” (Plumly 53) であって、シェリーはキーツを“feminize” (Kennedy 124) したのだという指摘は正しい。シェリーの恣意的アレンジがあったことは否めない。「同情をかき立て、語り手が感情的になって激しているのも無理はないと思わせるためだけでなく、語り手を優位に立たせるためにも」(Kennedy 125) キーツは弱い姿で描かれる必要があった。キーツは批評家に殺された、批評家は酷いことをしたという情報が作品を通して読者の間に流布することはシェリーにとって好都合であった。それは辛辣な批評家たちへの意趣返しになるし、同時にまだ現役で詩を書いて頑張っている自分の優位性を示すことにもなる。「可愛そう」と同情するスタンス自体が考えてみればひどく傲慢である。

しかし、シェリーがキーツの死を自分に都合よく利用するために最初から最後まで嘘で固めてエレジーを書いたと考えるのは余りにも単純だろう。キーツの死因に関する誤解にしても、シェリーではなくハントに元々の責任があったことは既に述べたとおりである。Plumly は、キーツの短い一生を初めから終わりまで見届けた人は誰もいなかったという事実を指摘する (90)。親しかった友人や弟妹でさえ“a whole Keats” (91) を見てはいなかった。

彼らは、長足の進歩を遂げて行くキーツの、その時々段階での姿を断片的に目撃したにすぎない。いわんや、深い付き合いもなく離れて暮らしていたシェリーに、キーツの成長の一部始終が理解できるわけがない。その程度の間柄でエレジーを書こうとしたこと自体が問題ではあるのだが、それはさて置いて、思うところがあってシェリーがエレジーの筆を執った時、彼の頭に想起されたのは、ハンサムだが痩せて小柄で¹¹体が弱そうな若い貧乏詩人としてのキーツ像ではなかったか。そこにシェリーの誇張や歪曲が加えられることになるにしろ、基本的にさほど実像とかけ離れた姿ではなかったはずだ。1821年当時の人々の目に映ったキーツは案外この程度のものであったかもしれない。我々が、キーツという詩人の全体像を把握し、Jack Stillingerが“Multiple Keats” (219) と表現するところの、様々な要素を併せ持った偉大なキーツを十分に認識できている（と思っている）のは、彼の死から今日に至る200年近い歳月の間に、特に20世紀に入ってから、試みられてきた多岐にわたる研究のお陰、つまり、昔ながらの現実逃避的キーツ像に疑問が投げかけられ、客観的に詳細に様々な研究がなされる中で彼の多様性が明らかにされてきた結果ではないだろうか。同じ時代に生きていた者が、キーツについて我々と同じように多くを知ることは却って難かしかったのかもしれないと思う。

いくつかの条件が重なってキーツ像が歪められてしまったのは確かだ。しかしシェリーがキーツの死を丸ごと自分のために利用しようとしてこのエレジーを書いたのではないことも調べて行くうちに明らかになった。シェリーはいかにも彼らしい身勝手さで、それなりに大いにキーツに同情したのである。多少の後ろめたさを感じながらも¹²、一応純粋な気持ちを持って、彼に代わって物を言ってみようのだと意気込んで「アドネイース」を書いたのであろう。あの世でキーツがこのことを喜んだかどうかはわからないが。

最後に一つ。このエレジーを、ミルトンの「リシダス」と比肩できる力作だと評価する Plumly の見解 (81) には承服しかねる。私はミルトン研究者

ではないが、ミルトンのファンの一入として、それは詩聖ミルトンに失礼であると思う。「アドネイス」はとて「リシダス」には及ばないことを論じてみたいが、紙数が尽きたのでそれは別の場に譲りたい。

注

- 1 Donald H. Reiman and Sharon B. Powers ed. *Shelley's Poetry and Prose* (New York: Norton, 1977) p.xix の解説参照
- 2 アドニス(Adonis)はギリシャ神話に登場する美少年である。愛と美の女神アフロディテ(Aphrodite ローマ神話の Venus に相当)と冥界の女王ペルセポネ(Persephone)が、この美少年を取り合って烈しく諍い、終に主神ゼウス(Zeus)が仲裁に入り、アドニスを冬期はペルセポネと、夏期はアフロディテと共に過ごさせるようにして二人の喧嘩がやっと収まったのであった。ところがアフロディテと過ごしていたある日、アドニスは女神の忠告を無視して野獣狩りに出かけ、猪に襲われて死亡する。アフロディテはペルセポネに頼んで彼を蘇らせてもらい、毎年春になると数ヶ月をアドニスと共に暮したと言われている。
- 3 キーツの作品はすべて Miriam Allott ed. *The Poems of John Keats*(London: Longman, 1970) より引用した。
- 4 続く行でアドニス(Adonis)の美貌が“Of fondest beauty,” (394) と表現されていることは面白いと思う。「愚かしい」という意味も持つ“fond”という形容詞の、しかも最上級の形でもって彼の美しさが言い表されているのである。ここに、キーツ自身の、アドニス(Adonis)評価が暗示されていると見ることはできるかもしれない。実は『エンディミオン』の随所に、キーツの詩想や審美眼の成熟の予兆は見え隠れしているのである。ただこの段階ではキーツ本人もそれについて殊更意識している訳ではなく、従って表面的には官能的で幻想的な描写の連続という印象しか与えない。
- 5 シェリーの作品は Donald H. Reiman and Sharon B. Powers ed. *Shelley's Poetry and Prose* (New York: Norton, 1977) より引用した。
- 6 1818年8月号には、キーツが薬剤師の免許を持っていることを踏まえて「売れない詩人になるくらいなら、売れない薬屋になる方がまだましだ。ジョン君、薬屋の商売に戻りなさい」などという底意地の悪いアドヴァイスが載った。
- 7 序文の中でシェリーは、「気の毒なキーツの臨終の詳細を私が知ったのは、このエレジーが印刷される頃になってであった」(The circumstances of the closing scene of poor Keats's life were not made known to me until the Elegy was ready for the press.) と書いている。ローマとピサとに離れ

て暮していたわけであるから、臨終の詳細がわからぬままエレジーを書くことは仕方なかったかも知れない。だがシェリーはキーツの亡くなった日すら知らず、あるいは確かめようもしない。“John Keats, died at Rome of a consumption, in his twenty-fourth year, on the ___ of ___ 1821;” と月と日を空欄にしたままにしている。細かいことは放っておいて、とにかくエレジーを世に出したいというシェリーの本音が透けて見える。

- 8 Alex Preminger and T. V. F. Brogan co-ed. *The New Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1993) p.324. “Elegy” の項の解説参照。
- 9 King-Hele の解説 (304-11) により「アドネイース」の内容構成をまとめると次のようになる。1-6 連は自身の悲しみの表明とアドネイースの母ユーレイニアに対する訴え。7-17 連で抽象概念が現れて悲しみを述べ、18-21 連でシェリー自身が再び悲しみを表明する。22-29 でユーレイニアは眠りから覚め死んだアドネイースの元へ。30-35 連は同時代の詩人たちの弔問の様子。36-38 連で批評家たちを非難したのち、39 連から最後の55 連までは死に対する勝利宣言がなされ、アドネイースの不滅が謳われる。
- 10 Thomas Gray (1716-1771) の “Elegy Written in a Country Church-yard” の80行目より引用したものである。
- 11 キーツは当時としても小柄であった。1818年7月22日の手紙の中で自分のことを “John Keats five feet high” (Rollins I 342) と書いている。1 foot を30.5センチとして換算するとキーツの身長は153センチほどだったということになる。
- 12 世人の理解を得られず厚遇してもらえないという自分の恨みを エレジーを書くことによって発散させた、つまりキーツの死を利用したというシェリーの思いを示すのが34連。ここでシェリーは自分自身を登場させ “Who in another’s fate now wept his own;” と表現する。「キーツの不幸が切実に感じられ、身につまされて泣いた」とも取れるが、「キーツの悲運を泣くで見せかけて、実は自分の身の上を嘆いていた」とも取れる。更にこの人物が額を見せるとそこには、「カインのような、あるいはキリストのような、血に染まった烙印があった」(Made bare his branded and ensanguined brow / Which was like Cain’s or Christ’s) というのだ。シェリーは自らを、弟殺しで有名なカイン (創世記4章) でもあると考えている。ここにもキーツに対する忸怩たる思いが見て取れる。キーツの死を知らされてシェリーは、驚き悲しみもしたであろうが、優れた才能を持つ手強いライバルが消えたことに何がしかの安堵感も持ったに違いない。これは人間誰もが経験する自然な反応であるが、シェリーは己の本心を恥じて、自分はカインかもしれぬと告白したのではないだろうか。

参考文献

- Allott, Miriam, ed. *The Poems of John Keats*. New York: Longman, 1970.
- Bush, Douglas, John Keats. London: Weidenfeld, 1966.
- _____, ed. *The Complete Poetical Works of John Milton*. Boston: Houghton, 1965.
- Coote, Stephen, *John Keats A Life*. London: Hodder, 1995.
- Fogle, R. Harter. *The Imagery of Keats and Shelley*. Chapel Hill: The Univ. of North Carolina, 1949.
- Jones, Lilla Maria, Crisafulli, “Shelley’s Keats” *The Challenge of Keats Bicentenary Essays 1795-1995*. Ed. A. C. Christensen, L. M. C. Jones, G. Galigani and A. L. Johnson. Amsterdam: Roadpi, 2000, 219-236.
- Kennedy, David. *Elegy*. London: Routledge, 2007.
- King-Hele, Desmond. *Shelley His Thought and Work*. Rutherford: Fairleigh Dickinson UP, 1984.
- Plumly, Stanley. *Posthumous Keats*. New York: Norton, 2008.
- Preminger, Alex, and Brogan, T. V. F., ed. *The New Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*. Princeton: Princeton UP, 1993.
- Reiman, Donald H. and Powers, Sharon B. ed. *Shelley’s Poetry and Prose*. New York: Norton, 1977.
- Roe, Nicholas, “John Keats’s ‘Green World’”, *The Challenge of Keats Bicentenary Essays 1795-1995*. 61-77.
- Rollins, Hyder Edward, ed. *The Letters of John Keats*. 2 vols. Cambridge: Harvard UP, 1958.
- Stillinger, Jack, “The ‘story’ of Keats” John Keats. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 2007. 211-225.
- Swann, Karen, “*Endymion’s beautiful dreamers*” *The Cambridge Companion to Keats*. Ed. Susan J. Wolfson. Cambridge: Cambridge UP, 2001, 20-36.
- The Poetical Works of Edmund Spenser*. 5 vols. London: Bell and Dally, n. d.
- Wu, Duncan, ed. *Poetry from 1660 to 1780*. Oxford: Blackwell, 2002.
- 川崎寿彦. 『庭のイングランド』名古屋、名古屋大学出版会、1983年。